アメリカ禅の誕生

── ローリー大道老師のマウンテン禅院 ──

岩　本　明　美*

1　はじめに

アーノルド・トインビー（1889-1975）は、その最晩年、20世紀最大の歴史的出来事は何か、とあるレポーターに尋ねられ、即座に「仏教の西洋への到来である」と答えたといわれる[1)]。

仏教は、今やアジアを超え、北米、オーストラリア、欧州諸国で盛んに実践され、研究されている。逆にアジアの伝統仏教に影響を及ぼすほどの受容ぶりである[2)]。アジア仏教圏外で最も仏教徒が多いのは、アメリカである。本稿は、そのアメリカの仏教を対象とする[3)]。

アメリカでは現在、浄土真宗・曹洞宗・臨済宗などの日本の伝統仏教、四大宗派すべて出揃ったチベット仏教、タイをはじめとする東南アジア諸国のテーラワーダ仏教、台湾の佛光山などの刷新された中国仏教、中国・台湾・韓国・ベトナムの禅、創価学会などの新仏教、その他実に多種多様な仏教が行われている。

> 西洋諸国では、いっときに、一つの場所に、おそらく同じ都市の同じ街においてさえ、およそありとあらゆる派に属する仏教伝統がすべて存在するという、尋常でない状況に人々が直面しており、それは、アジアでは決して起こらなかった事態です。[4)]

これは、2001年10月に、オーストラリアで放映された、*Buddha　Realms*という特別テレビ番組における解説の一部である。筆者は、このような光景を、ニューヨークとロサンゼルスで

＊ 関西大学非常勤講師

1）Trungpa（2003：Publisher's Foreword by Samuel Bercholz, p. xv）.

2）岩本（2008）で紹介している西洋人女性仏教徒に先導されたグローバルなビク尼戒復興運動は、その好例である。仏教のグローバリゼーションによって、アジアと西欧世界で仏教の近代化が同時進行するという、興味深い現象が生じているのである。

3）筆者は、岩本（2010：183-4）にて、西洋において仏教受容が高まった理由について、簡単で表面的ではあるが考察している。

4）Transcript of *Buddha Realms*, PartII: *Permanent Change*, TV documentary, Australia（http://www.abc.net.au/compass/s381200.htm）.

実際に目の当たりにした。この番組は、二週にわたって放映された。第一週（Part Ⅰ：*The Delusion of Permanence*）は、今日のアジアの伝統仏教を取材する。タイのテーラワーダ仏教が西洋近代精神の一つといえるフェミニズムの挑戦を受け、抵抗しつつも変容しつつある様子などを捉えている。第二週のテーマは、西洋社会における仏教である。アメリカとオーストラリアで仏教が様々に実践される光景が映し出される。先の解説は、この第二部のものである。

語り手は、米ユタ州立大学歴史学科教授（当時ペンシルベニア州立大学宗教学科教授）のチャールズ・プレビシ氏である。北米の大学で“American　Buddhism”を教えた最初の人物である。彼はまた、西洋仏教研究を仏教学のサブディシプリンとして確立することに尽力した先駆者の一人でもある[5)]。

1998年あたりから、アメリカ仏教に関する英語の学術論文や著作が続々と刊行されている[6)]。それらで用いられるアメリカの仏教実践者を分類する方法は、様々である。どれにも一長一短がある。単純にすっきりと分類することは難しい。本稿に関わる範囲で大雑把に分類するなら、アメリカの仏教実践者は、アジア系移民と改宗者に大別される。後者のうち、西洋人（ヨーロッパ系アメリカ人）の多くは、瞑想修行に惹かれ、禅、チベット仏教、あるいはテーラワーダ仏教（特に、そのインサイトメディテーション）を実践するといわれる[7)]。さらにその大多数が、中産階級以上で高学歴であるとも指摘されている。現在ではそのような西洋人仏教徒が先導する、僧院やセンターも、数多く存在するに至っている。

マウンテン禅院は、日本の禅の流れを汲むそのような僧院の一つである。今回は、日本の禅のアメリカへの布教の歴史を振り返り、マウンテン禅院がアメリカ文化のなかでどのような禅の花を咲かせたのか検討する。具体的には、アメリカ禅を代表するこの僧院を紹介し、その特徴について考察する。そして、マウンテン禅院が誕生した背景についても探ってみたい。

2　アメリカにおける日本禅の展開

日本の禅のアメリカへの布教の歴史を、その全般にわたって叙述することはできない[8)]。マ

5）［http://www.usu.edu/history/faculty/prebish/profileprebish.htm］参照。

6）日本語でも、ケネス・タナカ著『アメリカ仏教 ── 仏教も変わる、アメリカも変わる』（武蔵野大学出版会、2010）が、5月末までには発売される予定である。日本語で書かれた最初のアメリカ仏教の本格的な紹介書となる。タナカ氏は早くからアメリカ仏教に着目してきた一人であり、プレビシ氏との共著（*The Faces of Buddhism in America*, Berkeley, 1999）もある。

7）ちなみに、唱題を中心プラクティスとする創価学会インターナショナルは、アフリカ系やヒスパニック系をはじめとする多人種・多民族に支持されているようである（田中 2009：133）。

8）Prebish（1999: American Buddhist Communities of Japanese Origin, 8-20）に、アメリカにおける日本禅の展開が簡潔にまとめられている。本節の叙述は、主に、それと、Seager（1999：35-44, 90-105）、Fields（1992：168-194）、多田（1990）を参照している。また本節並びに次節に関しては、古くからの親しい友人である、日本在住のアメリカ人禅僧・禅文献翻訳家のトーマス・カーシュナー（釈雄峯）氏から、

ウンテン禅院の誕生につながり、かつその布教のあり方が文化交渉の点で興味深いと思われる人物を中心に、日本禅の展開の一断面をみることにしたい。

仏教は、1893年にシカゴで開催された万国宗教会議において、アメリカへ公式にデビューした、とみなすのが一般である。その後、アメリカ人が最初に熱中した仏教は、日本の禅である。禅仏教は、ビートの詩人たちを惹きつけ、1950年代後半からブームとなり、1960年代以降はその頃盛り上がり始めたカウンターカルチャー運動と呼応し、爆発的な人気を博した。既成の概念や制度を捨て去り、個々の創造性を重んずる禅は、その時代の反体制的精神に見事に合致したのである。

禅ブームをもたらした最大の功労者の一人は、周知のごとく、鈴木大拙（1870-1966）である。彼の英文著作や戦後のコロンビア大学での六年に及ぶ講義などによって、禅が広く浅く、しばしば誤解されながら、西欧世界に知られることとなった。大拙は、1897年以後の十二年間（最後の一年は欧州）と、1949年から1958年までの二度、アメリカを中心に長期間海外に滞在した。第一回の滞在は、参禅の師であった釈宗演（当時臨済宗円覚寺管長、1860-1919）の推薦による。シカゴ万国宗教会議で日本人代表８名の団長格であった宗演が、高名な宗教学者のポール・ケーラスと知り合ったのが機縁となった。大拙は、ケーラスの中国古典の翻訳の補佐をしながら、彼の出版社で編集員として働いた。

他方、宗演のもう一人の弟子である千崎如幻は、アメリカで禅の指導を行った先駆者である。孤児ともいわれる彼は、宗演に見込まれた。1905年にサンフランシスコのゴールデンゲート公園で、アメリカで禅を布教すべく、侍者の任を解かれた。爾来、無一物の彼は、ハウスボーイからホテル事業にいたるまでありとあらゆる仕事をこなした。「十七年間は仏教のぶの字さえ口にしてはならぬ」という師の言いつけを固く守り、1922年になってようやく、「浮遊禅堂」（floating Zendo）を始めた。日系人とアメリカ人に禅を指導し、日本文化などについて講義を行ったのである。「浮遊禅堂」とは、固定した本部をもたず、お金が貯まればどこかのホールを借りてする布教活動であったことに由来する。その後1928年に如幻は、サンフランシスコのブッシュ街に、「東漸禅窟」という道場と、東洋文化を伝えるための「群英学園」を立ち上げた。

当時カリファルニアには、すでに本願寺の東西両派、高野山の大師教会、日蓮宗、曹洞宗があり、各々特色を発揮して、在米同胞のために布教を怠ってはいなかった。しかしすべて母国における寺壇関係の延長にすぎず、積極的に白人の道友に伝道しようという気運は到来していなかった。如幻は、このような当時の状況を述べた後、「東漸禅窟設立趣意書」をこう続ける。

寒衲如幻業風に吹着せられて異郷に放浪すること二十余年、未だ悉く鴃舌鸚語に熟

貴重なご教示とご意見を頂くことができた。もっとも、以下に取り上げる人物に対する評価は、彼と筆者では、必ずしも百パーセント一致しているわけではない。

達せずと雖も、ほぼこの国の人情風俗を諳んじ、米人の思潮の趨勢を観察するに難からず。……

人或いはアメリカを以て黄金万能の国となし、アメリカの生活を以て百忙中一閑なきものとす。共にこれ皮相の見なり。黄金崇拝の裏側には、成功主義、精力主義の哲学プラグマテズムあり。伝統を離れ因襲を脱したるヒューマニズム其の基調たり。アメリカ人が隠忍不撓、常に何者かを創設し建設して倦まざるはこの牢固たる主義精神其の根底をなすによらずんばあらず。真にこれ豎子以て精進波羅蜜を教ゆるに足ると言うべきなり（多田 1990：23-4）。

宗演が期待した通り、如幻は、英語に不自由がなくなり、M.ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に相通じるような洞察を示すほどに、アメリカ文化と社会を知り尽くしたのである。彼は、日本人コミュニティの支援を得て、1931年にロサンゼルスへ移動しそこに落ち着く。その同じ年、東海岸では、曹渓庵（佐々木指月）がニューヨークにアメリカ仏教協会（後の「第一禅堂」）を立ち上げている。曹渓庵は、宗演の弟子で居士禅（両忘会）を復興した、釈宗活の門下生である。宗活がアメリカ布教を試みた時（1906-08, 1909-10）に、他の門弟たちとともに渡米し、曹渓庵のみがアメリカに残ったのであった[9)]。

曹渓庵も如幻も、戦時中は強制収容所にあった。曹渓庵は終戦を待たずに亡くなるが、如幻は、戦後1955年に一度だけ帰国している。彼は、酒を飲み、金銭を求め、独身を守らない日本の僧侶を僧とはみなさず、禅宗本山には背を向けた（Fields 1992：182）。中川宋渕（1907-1984）もまた同じ人間であった。如幻が1934年に『婦人公論』に掲載された中川の日記に共感したのがきっかけとなり、二人は交信し続けた。1949年に初めてロサンゼルスで対面している。

如幻は、ゴールデンゲートで別れて以来、宗演を二度とみることはなかった。だが、師に対する敬慕の念は強烈で、宗演の命日にはかかさず法要を営み、詩も創った。その如幻自身も、1958年に世を去った。中川が後を引き継ぎ、やがて弟子の嶋野栄道（b. 1932）が渡米することになる。

1960年からハワイ大学で勉強中であった嶋野は、65年に所持金５ドルでニューヨークへ渡ったが、ゼロックス発明者のチェスターカールソン氏から資金援助を受けるという幸運に恵まれた。68年にニューヨーク禅堂正法寺を、76年にはカットスキル山脈に、最も日本的だといわれる国際大菩薩禅堂金剛寺を建立した。嶋野は、72年に中川から嗣法したともいわれるが、今で

9）ちなみに、宗活は、平塚らいてうの参禅の師でもある。彼女が最初の見性を得て、いよいよ禅の道を極めようとした矢先に宗活が渡米してしまった。その後彼女は、有名な心中未遂事件を起こす。また宗活の二度目の渡米時には彼の勧めでらいてうも同行する予定であったが、彼女の同行を嫌う中年女性がいることを知り、とりやめてしまった。1911年に『青踏』を刊行するが、それは他者に強く促されてのことであり、当時のらいてうの関心は、仏道修行にあり、女性解放運動には一切なかった（Iwamoto 2005参照）。宗活が渡米しなければ、日本の女性解放史は、まったく違ったものになっていたことであろう。

はすでに複数のアメリカ人が嶋野の法を継いでいる。もっとも著名なのは、Shinge Roko Sherry Chayat老師である。アメリカで公式に禅の老師となった最初の女性ともいわれ、ニューヨーク州のシラキュース禅センター（The Zen Center of Syracuse、法縁寺）の住持である[10)]。

臨済宗の布教としては、以上の流れとはまったく別に、1962年に、佐々木承周（b. 1907）がロサンゼルスへ到着している。彼は、臨済寺禅センター（ロサンゼルス・シマロン街）、マウントボールディ禅センター(南カリフォルニア)、ボーディマンダ禅センター(ニューメキシコ)等を創設した。仄聞したところでは、百歳を過ぎ、なお指導を続けている[11)]。

さて、曹洞宗の流れでは、80・90年代に、鈴木俊隆（1904–71）と前角大山（1931–95）の門下から、傑出したアメリカ人禅僧が現れた。両老師とも、元は日本の教団からアメリカへ派遣された。しかし、二人ともやがて独立し、アメリカ固有の禅の創造を大きく促した。ちなみに、佐々木と嶋野は禅伝統に対してかなり保守的で、嶋野は、“go low” Americanizerと描写された（Seager 1999：96)。

鈴木は、1959年55才の時に妻とともに渡米し、サンフランシスコの桑港寺の六代目住職に着任した。充分な修行を積み、英語にも堪能であった鈴木のもとには、おのずとアメリカ人が集まってきた。鈴木にとって、彼らは、坐禅修行に関心を示さない檀家よりも魅力的であった。鈴木は、三つの施設からなる、サンフランシスコ禅センターを築き上げた。三つとは、専門道場のタサハラ禅マウンテンセンター（1967）と、リトリートプログラムなどを実施するグリー

10）筆者は、Shinge老師と面識がある。2006年５月に、筆者（当時ニューヨーク州立大学アルバニー校ポスドクリサーチフェロー・客員教授）は、カナダのケベック市で開催された、Eastern International Region of the American Academy of Religionの年次学術大会で研究発表（Buddhism in the West as Seen from Japan: The Sakyadhita Movement and Japanese Buddhism）を行った。Shinge老師は、その大会の基調講演者として招待されていた。機敏で、立ち居振る舞いの正しい（威儀即仏法の)、女性らしい人あった。まったく予想しなかったことであるが、筆者の発表はずいぶん好評であった。ビザの延長がままならず実現しなかったが、その学会の会長であった、コーネル大学アジア学科教授Jane Marie Law（過去に五年間日本に研究滞在）から、発表直後に秋学期にコーネル大学で講演するように依頼された。また、Shinge老師にも原稿を所望されて、後日改訂版を送付した。その後その拙稿がアメリカの女性禅教師たちの集会で読まれたという。驚きである。両者とも、日本仏教と西洋仏教との関係よりはむしろ、グローバルな女性仏教者運動に関してより興味があったようである。

11）筆者は、京都大学大学院院生時代（1994年３月）に、佐々木承周老師夫人のHaruyo氏のご好意で、シマロン禅センター（現在の臨済寺禅センター）の寮に一泊させて頂いたことがある。Haruyo夫人に、承周老師にお目にかかりたい旨、禅センターを見学したい旨を、再三再四伝えたが、聞き入れられなかった。筆者（学部は花園大学禅学専攻）が禅の勉強をし、日本の伝統的な禅寺をよく知っているから、というのが拒絶の理由であった。伝統とはかけ離れたアメリカの禅堂を絶対に見せたくないということで、代わりに、ハリウッドやビバリーヒルズを、雨中とても小柄なHaruyo夫人の（恐ろしい？）運転で案内されるはめとなった。今をもって残念である。なお、この筆者の個人的な訪問は、ニューメキシコ州のサンタフェで開催された第10回京都国際禅シンポジウム（James W. Heisig and John C. Maraldo eds., *Rude Awakenings: Zen, the Kyoto School, & the Question of Nationalism*, University of Hawaii Press, 1995は、そのシンポの報告論文集）の後になされた。筆者は、第７回よりこの国際禅シンポジウム開催の手伝いをしており、サンタフェ会議にも参加し、その延長で Haruyo夫人に紹介された。

ンガルチファームと、シティセンター（1969）である。大拙などの著書を読み、坐禅からドラッグと同じ効能が得られると誤解したヒッピーたちに、鈴木は「只管打坐」でもって応じた。彼の説法を編集した*Zen Mind, Beginner's Mind*（1970）は、今や古典である[12)]。鈴木の死後、後継者問題や権力の濫用などで大混乱したが、現在は安定し、洗練された現代的な多彩なプログラムを提供している。ちなみに、修行者のなかには、今ではアフリカ系アメリカ人（Zenju Earthlyn Manuel）もいる。サンフランシスコ禅センターでは、日本語で『般若心経』を唱えるが、彼女がそうする姿は、実に感慨深い[13)]。

前角博雄大山（1931–1995）も、曹洞宗の寺に生まれた。11歳で得度し、1955年に父の黒田白純の法を嗣ぎ、学生時代には、臨済宗の芳坂光龍に師事している。前角は、1956年に、ロサンゼルスの禅宗寺の主任開教師となった。その後、三宝教団の設立者安谷白雲老師にも師事し[14)]、1967年にロサンゼルス禅センターを起こす。家族ぐるみでの実参と自給自足の実現を目指したセンターであったが、周囲の治安の悪化や前角自身の個人的な問題等で一時危機的な状況に追い込まれた。その危機は、このセンターを特集したドキュメンタリーフィルムの中心テーマとなっている[15)]。

前角の十二人の嗣法者は、それぞれユニークな活動を展開しているが、グラスマン徹玄（Tetsugen Bernard Glassman, b. 1939）とローリー大道（Daido John Loori, 1931–2009）が傑出している。二人は、性格のまったく異なる禅団体を創った。Zen Peacemakers（旧名 Zen Peace Maker）と、今回取り上げる山川教団である[16)]。

アメリカ固有の禅を創造する運動の完成形態を、この二つの団体にみることができるであろう。その運動は、1960年を境に、理論から実践へと移行したといわれる（Fields 1992：243）。大拙の神秘性を強調した禅の宣伝や、如幻や曹渓庵の椅子を使った坐禅の指導など、先駆的な

12）本書は、鈴木俊隆老師の友人であった紀野一義氏によって邦訳されている（『禅へのいざない』PHP研究所、1998）。

13）2006年にマレーシアで開催された、第9回サキャディータ国際女性仏教者会議の開会式で、日本仏教の代表として、彼女が壇上で『般若心経』を唱える姿を写真でみることができる（*Sakyadhita Newsletter*, Winter 2006［http://www.sakyadhita.org/NewsLetters/pdf/SakyadhitaNewsletter%2015_2a.pdf］）。この会議に日本から参加する尼僧はめったにおらず、今回も、彼女と、同じくサンフランシスコ禅センターから参加した西洋人女性出家者との二人のみが日本仏教の代表として壇上に立ったようである。なお、サキャディータの運動については、岩本（2008）参照。

14）安谷の師であった原田祖岳老師は、曹洞宗に属したが、臨済宗の公案も用いて指導した。さらに入門者には、摂心を始める前に講義を行い、正しい実践法を詳しく解説した。禅宗では、伝統的にはそのような解説は行わない。原田本人がアメリカの地を踏むことはなかったが、このような禅宗の近代化は、間接的にアメリカ禅の形成に寄与した（多田1990：166–8）。ちなみに、三宝教団は、原田・安谷禅宗（Harada–Yasutani School of Zen）とも呼ばれる（Prebish 1999：17）。

15）*Zen Center: Portrait of an American Zen Center*（Lou Hawthorne, written and produced by Ann Cushman, 1987, 53 min., Miracle Productions, Albuquerque, N.M.）.

16）グラスマン徹玄については、岩本（2010：186–7）参照。

努力によって、禅の種が蒔かれた。その種が本格的な実践段階に入り、人を媒介に、アメリカ文化との熾烈な交渉を繰り返しながら成熟していったのである。個々の交渉劇、たとえば民主主義と修行制度上のヒエラルキーとの間の駆け引きなど、の吟味は別に譲り、今回は完成態を検討する。

3　マウンテン禅院

山川教団（Mountains and Rivers Order of Zen Buddhism; MRO）を創設した、ローリー大道老師は、昨年（2009年）10月に遷化した。この教団名は、道元の「山水経」（正法眼蔵）に由来する[17]。このMROの中核施設が、マウンテン禅院（Zen Mountain Monastery; ZMM）・道真寺である。

ZMMは、ニューヨーク市とそこから北へ車で3時間の所にあるニューヨークの州都アルバニー市のほぼ中間の、「南泉斬猫」を連想させるカットスキル山脈（Catskill Mountains）にある。豊かな自然をもつこの一帯には、先述した大菩薩禅堂をはじめ、チベット仏教や中国仏教などの僧院やセンターが点在する。また、芸術家の多く住む町、ウッドストックもすぐ間近である。ZMMは、山を背に二つの川が交差するところに建つ。中国の伝説によれば、このような景観は大きな力の場を暗示し、とりわけmonasteryに適しているという（Loori 2002：3-4）。現在のZMMの諸施設は、元はドミニコ会の修道士によって建てられたものである（Loori 2008：p. x）。

MROは、ニューヨーク市にも、火蓮寺（Fire Lotus Temple）という道場をもつ。一度覗いてみたことがあるが、仕事帰りに坐禅をするニューヨーカーたちが集まっていた。週末には、片道数時間ドライブし、ZMMのプログラムに参加する者もいる。

さて、2005年10月1日土曜日に、畏友のマギル大学宗教学科教授Victor Sōgen Hori（堀宗源）氏とともに、一泊二日でZMMを訪問した。Hori氏は、日系カナダ人で、1970年に文部省の奨学生として来日した折に坐禅を始め、1976年に臨済宗大徳寺で正式に出家し、その後1990年にカナダに帰国するまで出家修行を積んだ[18]。大菩薩禅堂も訪問しようとしたが、嶋野老師が留守であったため、代わりに2005年6月にリニューアルした天台宗の寺院（Canaan, New York）に立ち寄り[19]、午後2時頃にZMMに到着した。

17）教団の公式ウェブサイト（http://www.mro.org/mro.html）には、「山川」というロゴマークが使用されている。「山川」となったのは、「山水経」の英訳語である“Mountains and Rivers Sutra”から日本語へ還元したためであろう。

18）Hori氏の主著は、『禅林句集』の訳注研究である、*Zen Sand: The Book of Capping Phrases for Koan Practice*（University of Hawaii Press; Bilingual edition, 2003）である。

19）住職は西洋人で、西洋人のための寺である。［http://www.tendai.org/］参照。当初は、二泊三日で、近隣のチベット仏教と中国仏教の僧院も訪問する計画であった。しかし結局時間がとれず、一泊二日のツ

大道老師とHori氏は、古くからの知り合いであり、我々は客としてもてなされた。大道老師が直々に、広大な敷地（230エーカー）を案内して下さった[20]。その後、大道老師の住居のテラスで、法嗣の方々など数人とともにお茶をごちそうになった。少し前に日本のジャーナリストが取材に来たと聞いたが、我々が翌日の午後帰路につこうとした時には、見学に訪れた日本・中国仏教の碩学である元イェール大学教授Stanley Weinstein氏と出くわした。Hori氏はしばし偶然の再会を楽しんだが、ZMMの経験すべてが、彼にも新鮮で刺激的であったようだ。

我々は、金曜から始まる週末リトリートの一部（土曜日の夕食から日曜日昼食まで）に参加した。食事は、精進料理ではなく、質素でもごちそうでもなかったが、自家栽培した野菜をふんだんに使った、愛情のこもったとてもおいしいものであった。食事の準備、作務、日常儀礼行事、そして坐禅の間、門下生をはじめ、皆敏速に行動し、雑念の起こるスキを与えないように工夫された禅道場特有の緊張感があった。参加者は三、四十人で、年齢の幅は広かったが、二十代、三十代が多かったように思う。また芸術家（ふぜい）も、一、二割は居て、全体に明るく快活であった。

大道老師は、始終穏やかで、温情溢れる方であった。容姿は典型的な西洋人なのに、天龍寺元管長平田精耕老師（1924-2008）を彷彿とさせるほど日本的な感じがしたのは、禅修行の賜物かと思われた。我々を温かく迎えて下さった大道老師のご冥福を祈りつつ、以下、見聞したところを踏まえ、ZMMを中心にMROについて紹介する。なお、ZMMでの経験に対するHori氏と筆者の感想は、概ね一致している。

ZMMの前身であるZen Art Centerは、MROとともに1980年に大道老師によって創設され、Zen Art Centerは、1983年に正式に禅院となった。当時、大道老師はまだ法を継いでいなかったため、前角が住持（abbot）となった。大道老師は、前角から、1983年にdenkai（伝戒）を、1986年にshiho（嗣法）を受け、その後1989年（？）にZMM住持となり、亡くなるまでその任にあった（Loori-bio：Religious Life）[21]。

なお、大道老師は、1976年に前角に出会う以前、1972年から76年までは臨済宗の中川宋渕と

アーとなった。

20）ZMMの四階建てのメインハウスには、禅堂、台所、食堂、トレーニング事務所、図書館、仏殿、寮、個室がある。その他、広大な敷地には、大道老師も永眠する墓地、茶室、隠遁小屋（Hermitage）、長期の住み込み修行者のためのキャビンや、A-Frameハウスがある（http://mro.org/zmm/aboutus/buildingsandgrounds.php）。また、後述するダルマコミュニケーションズの立派な建物も、同じ敷地内にある。いずれの施設にも、芸術的センスのよさが感ぜられた。

21）前角の亡くなる直前に、グラスマン徹玄がinka（印可、final seal of approval as Zen Master）を受けた。その後1996年に、グラスマンがマーゼル玄法に、継いで玄法が大道に印可を与えている（Maezemi-bio参照）。十二人いるとされる前角の（第一世代の）法嗣（dharma successor）が、inkaを受けた者をいうのか、shihoを受けた者をいうのか、判然としない。また、inkaを受けた者のみがroshiとなるのか、それも不明である。

嶋野栄道に師事している。さらに、1997年には原田･安谷系と臨済宗隠山系（Harada-Yasutani and Inzan lineages of Rinzai Zen）からも嗣法している（Seager 1999：257）。大道老師はまた、文筆家でもあり、一流の写真家でもあった。アメリカ自然史博物館などで個展（写真展）を度々開催した（Martin 2009）。このような大道老師の豊かな経験は、MROの構築にいかんなく発揮された。

大道老師は、アメリカには稀な、規律の厳しい、高度に組織された禅院を築き上げた。ZMMは、出家者（monastics）、在家修行者（lay people）だけでなく、門下生ではない一般人（世俗）も参加できるプログラムを有する、開かれた道場である。その道場のトレーニング基盤となっているのが、禅の八門だ。まずこれを一瞥しよう。

八門とは、1. 坐禅、2. 独参、3. 学問研鑽、4. 日常儀礼、5. 正しい行動、6. 芸術プラクティス、7. 身体プラクティス、そして 8. 労働プラクティスである[22]。八門には、臨済宗と曹洞宗の両方の伝統が反映する。第一の坐禅が、この八門の基礎をなす。これがなければ、他もすべて仏道でなくなる。ZMMでは、曹洞宗のやり方に従い、壁に向き合って坐る。

次の独参（study with a teacher）とは、修行者が坐禅から生じる疑問や洞察について、教師から個人指導を受けることなどである。公式ウェブサイトや、Loori（2002）には明示されていないが[23]、おそらく独参では、日本臨済宗が独参で行うような公案修行もなされているはずである。Loori（2005）は、道元の『三百則』（正法眼蔵）の英訳に、大道老師自身の評釈と偈頌を付け加えたものであるが、大道老師は説法でこれをよく参照する。おそらく、ZMMの公案修行にもこの三百則が中心に用いられているであろう。

第三の学問研鑽（academic study）とは、祖師の語録や、経典その他の勉強である。積極的な経典学習などは、修行の妨げになるということで、日本の禅宗では現在行われていない。臨済宗では入門後一、二年は新聞を読む事さえも禁じられている、と耳にしたことがある。しかし、仏教にほとんど馴染みのない西洋人には、そのような仕方は適切でない。仏教経典やその注釈書の学習も、うまく取り入れるなら健全な宗教実践を確立するのに有効である、とみなし、ここでは重視されている。達磨大師は、禅は言葉や文字に依拠しないとは言ったが、それは禅修行に言葉や学問の場がないということを意味しない、という了解がその根底にある。MROではさらに、修行レベルに応じた図書を読むように推奨しているが、これについては後述する。

第四番目は、日常儀礼（liturgy）である。我々は禅の日常儀礼において直感的に知るものを形で表わすという立場から、MROでは儀礼が重んぜられる。応量器と呼ばれる曹洞宗の複

22）八門の詳細については、［http://mro.org/zmm/training/eightgates.php］及び Loori（2002）参照。
23）MROの公式ウェブサイトには門下生専用のページが設けられており、修行等に関して部外者には確認できない点もある。

雑な食事作法も行われている[24]。なお、ZMMは、「道真寺清規」（Doshinji Code）と呼ばれる独自の規矩に従って運営されている（Loori 2002：p. ix）。

第五の正しい行動（right action）とは、仏教の戒（precept）、つまりブッダの道徳的、倫理的教えの研究と実践のことである。戒は、MROにおいて特別な意義を担い、非常に重視される。戒は、本質的に、ブッダの人生についての、あるいはブッダが世界でどう生き、働くかについての規定だとみなされる。つまり、悟った者が、日常生活で智慧と慈悲を顕示しつつ、どのように人生を送るのか、他人やこの惑星とどう関わるのか、どのように道徳的で倫理的な決定をなすのか、についての教えということになる[25]。このような戒の捉え直しによって、この教団では様々な形で社会に貢献している。たとえば、刑務所で坐禅と日常儀礼と説法を行う組織（National Buddhist Prison Sangha）を通した活動や[26]、環境保護活動などを行っている。

第六は、芸術プラクティス（art practice）。創造性とスピリチュアリティは源泉を同じくすると確信し、この道場では創立当初から伝統的禅芸術と現代西洋の禅アートとの両方を学ぶ。「自己」を深く探究するためである。

第七は、身体プラクティス（body practice）。弓道や太極拳といった洗練された訓練から、洗顔といった日常的な行為に至るまで、すべてが身体的行とみなされる。つまり、悟りによって体得される「身心一如」という真理を踏まえたものである。

最後は、労働プラクティス（work practice）。所謂、作務である。単純な繰り返しの仕事から始め、徐々に複雑さを増す。「我々のスピリチュアルなプラクティスは、超絶した山頂で働くのではなく、市場（market place）において生き、働く、聖なる行動へと翻訳されねばならない」という信念に基づくものである。

以上、八門についてみたが、MROは一方で、修行を段階づけている。十階梯ある。それらは、精神的な進展を示した「禅の十牛図」と対応し、各々の階位において、八門すべてが訓練される。「このような階梯を設ける目的は、それぞれの段階における門下生の達成度合いを規定し跡づけるためであり、また彼らのトレーニングにおける連続性を保証するためでもある」。門下生ひとりひとりに対して、詳細なトレーニングの履歴も残されている（Loori 2002：9）。

さて、MROは、以上の八門と十階梯を基盤に、各種のトレーニング・プログラムを設けている。そのほとんどがZMMにおいて実施されるものだが、一部は火蓮寺でも実践可能である。

一年は四期に分けられ、春と秋に、90日の安居（集中トレーニング）を行う。また毎月、三

24）この様子は、MROが制作販売しているビデオ（*Oryoki*：*Formal Monastery Meal with Daido Roshi*）で見ることができる。

25）［http://mro.org/zmm/training/jukai.php］参照。

26）アメリカにおいて刑務所で坐禅指導をした最初の人物は、大道老師である。もとはある服役者の依頼（手紙）に応じた、個人的な活動であったが、やがて組織だった全米に広がる活動へと発展した。詳しくは、Loori（1998）参照。

日間の禅入門プログラム（Introductory Zen Training Weekend）と、一週間の集中瞑想プログラム（摂心）を提供する[27]。さらに、ビジターあるいは初心者向けのプログラムとして、二種用意されている[28]。Sunday Morning Programと Wednesday Evening Meditationである。どちらも坐禅指導を含んでおり、これを受ければ、摂心以外のZMMのすべての瞑想訓練への参加資格もできる。一方、週末リトリート・プログラムも色とりどりで、ほぼ毎週末行われる[29]。弓道入門や尺八入門などもあり、そのような場合はそれぞれの専門家が講師として招かれる。ちなみに、高名な仏教教師や有名な学者を招いてワークショップやセミナーを催すこともある。これまでに、ティク・ナット・ハン（ベトナム人禅僧）やPema Chödrön（アメリカ人チベット仏教尼僧）も招聘されている[30]。

ZMMに住み込んで修行をすることも可能である[31]。一ヶ月と一年間のコースがある。費用はひと月650ドルから750ドルである。全食費、宿泊費、トレーニング費用、そしてほとんどすべてのリトリートの参加費を含む。宿泊する施設によって、値段が異なる。また一年間の住み込み修行をしたいと思っても、経済的に困難な場合には、労働等を提供することによって可能となることもある。いずれにせよ、住み込みプログラムへの参加資格を得るためには、古参の修行者によって、動機の妥当性が承認されねばならない。

他方、正式な門下生となるためには、五つの関門を突破する必要がある[32]。五つの関門とは、1. 禅入門週末リトリートへの参加、2. 禅院での一週間の摂心の修了、3. MROの古参グループ（Guardian Council）との面談、4. 日の出から日の入りまでの独坐[33]、そして5. 師匠に教えを乞うことである。門下生は住み込みの義務をもたないが、訪問、あるいはリトリートや摂心への参加、あるいは短期間の住み込みによって、教師及び教団と関係を維持する必要がある。

さらに、条件を満たせば、菩薩戒を受けることも可能である[34]。条件とは、門下生となってから最低二年間修行していること、及び戒に関する一連のリトリートを修了していることである。また、公衆の面前で行われる受戒儀式に先立つ一週間は、教師たちとともに受戒の意義について学ぶ特別な集中訓練も課せられる。なお、MROが授ける菩薩戒とは、三帰戒と三聚浄戒と十重禁戒であり、日本の曹洞宗と同じ、十六条戒である。この菩薩戒が、世俗社会を航海する羅針盤となる。

27）［http://mro.org/zmm/training/］参照
28）［http://mro.org/zmm/visitingzmm/］参照。
29）［http://mro.org/zmm/retreats/］参照。
30）［http://www.mro.org/dragonhall/zmm.php］参照。
31）［http://mro.org/zmm/residential.php］参照。
32）［http://mro.org/zmm/training/becomingstudent.php］参照。
33）ここではTangaryo（旦過寮）と呼ばれるが、臨済宗の行う旦過詰と同じであろう。
34）［http://mro.org/zmm/training/jukai.php］参照。

出家者[35]となるには、一層厳しい条件を満たさねばならない[36]。門下生となってから、少なくとも五年を経ていなければならず、最低三年間は、この道場に住み込んだ経験を要する[37]。もっとも、MROは出家制度を整えているとはいえ、大道老師の禅の入門は、とりわけ在家修行者のニーズや目標に応ずるべく工夫されたものである。

さて、MROは、禅環境学インスティテュート（Zen Environmental Studies Institute）と、ダルマコミュニケーションズ（DC）も設立した。前者は、ZMM敷地外に施設をもち、近郊の豊かな自然のなかで自然から学ぶプログラムの提供など、広汎な活動をしている[38]。自然を愛する大道老師は、早くから環境問題にも取り組んだ。

後者のDCは、MROの非営利の教育･アウトリーチ部門である[39]。近代技術を駆使して、ブッダの教えを広く普及させる努力をしている[40]。季刊オンラインジャーナル（*Mountain Record*）の発行や、オンラインコミュニーケーション（Cybermonk）の確立はその努力の現れである。さらに、オンライン禅ラジオ局（WZEN.org）を設置し、大道老師やその他の先生たちの説法も流している。また、仏教一般と禅に関するビデオテープや書籍のみならず、多種のメディテーション用クッションやMROが発明したメディテーションタイマー、仏具や茶道具なども、ZMMのストアとインターネットで販売している[41]。どれも現代的で大変センスがよい。このようなDCの活動によって、禅院や教師にアクセスが困難な人たちにも、禅が身近なものとなった。

最後にMROの国際ネットワークについて触れておきたい。MROは、山川協会（Society of Mountains and Rivers; SMR）という連合組織を形成し、バーモント州やニュージーランドに拠点をもつ。SMRは、提携しているアメリカ国内外の坐禅グループに対して、坐禅の場所を

35）MROの出家は、禅院の外で暮らさないという意味であって、必ずしもCelibacy（独身）であることを意味しない。ZMMには、出家者同士のカップルも住んでいる。訪問時にZMMの教師（dharma holder）であるJody Hojin Kimmelさんから直接伺ったことであるが、彼女とZMMのもう一人の出家者は、カップルであった（制度上もおそらく結婚している）。二人はZMMで知り合い恋仲となったために破門された。しかしMROは、こういうケースの救済措置として、一年後に今度はカップルとして再入門できる制度を設けている。つまり彼らは一年間熟考した結果、この制度を利用したのである。その他、出家にまつわる起こりうる様々なケースについても、道真寺清規に規定があるようである。Arslanian（2005）では、アメリカの禅院におけるセクシュアリティの問題についての社会学的な興味深い考察もなされている。その論考を入手したのはほとんど脱稿した後なので、本稿にはArslanian氏の知見は全く反映されていないが、この文献をEメールにて送信して下さったHori氏にはお礼を申し上げたい。

36）［http://mro.org/zmm/training/monasticpractice.php］参照。

37）Loori（2002）のMyotai Treaceの Forewordによると、その当時出家者数は５人で、住み込み修行者は30人である。

38）［http://www.mro.org/zesi/zesihome/index.html］参照。

39）［http://dharma.net/］参照。

40）大道老師は、食品会社にナチュラル・フレーバーを分析する化学者として勤めた過去がある。その職のお陰で、彼はコンピュータに精通していた（Prebish 1999：98–9）。

41）［http://dharma.net/monstore/］参照。

提供したり、リトリートプログラムを主宰する教師を派遣している[42]。提携者の大半は、門下生である。

一方、ZMMは、White Plum Sangha（旧名White Plum Asanga）という国際ネットワークの一部でもある。White Plum Asangaは、1976年頃、前角によって起こされた。前角とその弟子たちが所有する、国内外の道場やセンターをリンクするための組織として始まった。前角の死後、正式に宗教法人組織となり、その成員は、前角の法系の禅コミュニティのリーダーたちである。今や第4世代にまで拡張している（Jones 2004：4）。禅コミュニティの教育･宗教･運営プログラムに関する情報交換を目的としている。

さらに、ZMM（道真寺）は、日本の曹洞宗の寺としても正式に登録されている。大道老師は、1987年に住職資格を得るために来日して瑞世式を受け、一夜、永平寺と総持寺の住職となった。十二人のMROメンバーが随行した。前角老師は、この行事について感慨深く、こう述べている。

> この行事は、公式の資格授与であり、東洋から西洋への伝播の信頼性と連続性を公認する役割を担った。ダルマのアジアへの伝播と同様に、ここ西洋でもダルマがその根を深くおろし、西洋文化の中に確立されることが私の願いである。そうなれば、ダルマは、その終わりのない展開を続けるであろう。[43]

前角が1987年夏にこの一文を草して以来、すでに二十二年の歳月が流れた。その間マウンテン禅院は、日本の曹洞宗に加盟しているとはいえ[44]、それから運営上は完全に独立し、独自の発展を遂げた。MROのスピリチュアリティに関心を示す者は増大し、施設も手狭となった。現在、新しい施設（Dragon Hall）を建設すべく、募金活動を行っている[45]。大道老師は、三人の弟子に嗣法を与えた。Bonnie Myotai Treace（1996）とGeoffrey Shugen Arnold（1997）とKonrad Ryushin Marchaj（2009）である。Myotaiは独立し、残った二人が現在MROを先導している。大道老師を失い、教団は、しばらく不安定な時期を経験するやもしれない。しかし、アメリカの大地にしっかりと根をはった大道老師の禅は、やがてDragon Hallという新た

42）以前は、ニューヨークの州都アルバニー市にも提携した坐禅グループ（Providence Place Zendo）があった。筆者は、2005年秋から一年間、ニューヨーク州立大学アルバニー校に勤務していた時、五、六回夕方の坐禅会に参加したことがある。近くに住む大学院生や若手の会社員などが集っていた。坐禅中は真剣そのものであったが、終了後はお茶を飲みながらの楽しい談話のひとときとなった。参加費は無料であったが、ほとんどの者が2ドル程度のお布施をしていた。

43）Loori（2008：Foreword by Maezumi, p. xi）.なお、原文のenfoldmentをunfoldmentの誤植と判断して和訳した。

44）1994年には、大道老師は、曹洞宗の伝道教師の資格も得ている（Seager 1999：257）。

45）［http://www.mro.org/dragonhall/］参照。

なヴィジョンを実現することであろう。

4　禅とチベット密教の邂逅 ── マウンテン禅院誕生の背景

以上、MROについて概説した。MROの禅は、日本の禅の流れを汲みながらも、日本の禅とは相当異なっていた。それは、「大道老師の中心課題の一つが、仏教の伝統的な価値を21世紀のアメリカの文化文脈へ統合することであり、そのためには、堅固な在家修行を支え、また逆にそれによって維持される、実行可能な仏教僧院制度の創設が中心となった」（Kirchner 2006：p. xiii）からに他ならない。では、日本の禅は、アメリカの文化文脈にもたらされた結果、どのような特徴をもつに至ったであろうか。

まず、MROには、西洋仏教におよそ共通して認められる次の三つの特徴がある。第一は、修行上及び運営上、性差別がないことである。ZMMでは男女並んで修行し、また大道老師はゲイも同じように受け入れた（Kain 2001：1）。第二は、積極的な社会活動であるが、MROの社会貢献については、すでにみた。第三は、伝統的には出家者のための修行を、在家者を中心にして行う点（出家修行の一般化）である。大道老師がまさにこれを基本として修行システムを構築したことも、すでに確認した通りである。

さて、このような特徴は、仏教が近代化し世俗化したキリスト教文化圏に伝播した場合、備わって然るべきものであろう[46)]。しかしZMMの修行システムには、単に禅がアメリカ文化に晒されただけでは生じ得ない、その他の独自の創意工夫がある。その工夫のなかには、伝統的な修行形態の復興もある。たとえば、禅の八門は八正道の現代版に他ならない。また、日本の禅宗では現在行われていない、経典学習などの学問研鑽も復活させている。これなどは、「教外別伝・不立文字」を文字通り標榜する現在の日本禅からすれば、革命的なことといえる。さらに、修行階梯を設けたこともまた、革命的である。大道老師自身がいうように、アジアであれアメリカであれ、ZMM以外の禅の修行者に「私は今、第４階位です。あなたはどの階位ですか」（Loori 2002：41）と尋ねたなら、何のことを問うているのか、相手にはさっぱり理解されないであろう。

大道老師は自身のアプローチをradical　conservatism（抜本的保守主義？）と呼んだが、彼はどうしてこれほどの刷新を行い得たのであろうか。筆者は、この背景には、他の仏教宗派の影響があると推察している。とりわけ、チベット仏教カギュ派第11代トゥルンパ・トュルク（活仏転生者）であるチョギャム・トゥルンパ（1940–1987）から、直接あるいは間接的に大道老師が受けた感化は、甚大であったとみなしている。以下、本節ではこの点について検証する。

46）たとえば大道老師は、キリスト教に関連することとして、こう述べている。「MROを確立するにあたって、我々はキリスト教修道士と開かれた対話を続け、彼らから多様な形態を学び、彼らの長い歴史と西洋文化との関係を尊重した」（Loori 2002：10）と。

トゥルンパは、西洋にチベット仏教を布教した第一世代のラマで、欧米に百以上の瞑想センター（ダルマダートゥ／法界）を築くなど、西欧世界にチベット仏教の一大基礎を築いた人物である。1959年にインドへ亡命、1963年にオックスフォードへ留学後、1970年に北米に移住し、亡くなるまでの十七年間、欧米各地で流暢な英語で法を説き、カリスマ的な人気を博した。弟子たちの間でヴィドヤーダラ（vidyādhara, 学者or持密呪者）と呼ばれた、博学のタントラ行者であったトゥルンパは、仏法を現代世界にふさわしい斬新な形と仕方で提示した。その影響は、宗派を超えて及んだ[47]。

ではまず、大道老師がトゥルンパに私淑していることを顕著に示す例から指摘しよう。それは、先に触れたMROの推薦図書に関連する。推薦図書は九階梯（stage）、六分野に分類される[48]。もっとも九階梯すべてが、六分野をもつわけではない。六分野とは、1. 近代以前の大師・祖師の語録や著作（Records of Ancient Masters）、2. 現代のマスターの著作や説法録（Records of Modern Masters）、3. 公案集（Koan Collections）、4. 歴史、5. 経典、6. 哲学及び教義（Philosophy and Theology）である。

着目すべきは第二の現代のマスターの著述である。この分野をもつのは、第1階位から第6階位までであるが、その全六階梯において合計34冊17名の図書が提示される。当然のことながら大道老師のものが最多で、10冊が含まれる。大道老師を除いた16名のうち、4名以外はすべて禅者であり、Robert Aitken老師の3冊が最多である。禅者でない4名とは、トゥルンパとその直弟子のペマ・チョドン（Pema Chödrön）、同じくチベット仏教のSogyal Rinpoche、そしてインサイトメディテーションをアメリカに普及させたJack Kornfieldである。後者二人はそれぞれ1冊ずつ、トゥルンパは4冊、チョドンは2冊が挙げられる。つまり、大道老師の次に多いのは、トゥルンパなのだ。しかも現代のマスターの著述の最高レベル（第6階位）に挙げられる最後の1冊も、トゥルンパの著作（*Transcending Madness: The Experience of the Six Bardos*）に他ならない。

さらに次の点も興味深い。トゥルンパの著作の示されるその他の階位は、第2階位（*Cutting Through Spiritual Materialism*）と、第3階位（*The Myth of Freedom and the Way of Meditation*）と、第5階位（*Dharma Art*）である。一方、トゥルンパの法を継承したチョドンの著作は、それぞれ第1階位（*Start Where You Are*）と第4階位（*The Places that Scare You: A Guide to Fearlessness in Difficult Times*）に登場する。つまり、現代のマスターの著

47）岩本（2010）にトゥルンパの略伝を付したが、矮小化してしまったきらいがある。彼が西洋仏教の形成に果たした役割はとてつもなく大きい。思想的にも、逸脱しているという意味ではなく、仏教史上先例をみない。ダライラマ14世でさえ、彼が西洋文化社会に仏教的教えを示す時、トゥルンパから学んでいるのではないかと感ずることがある。ちなみに、ダライラマの最初の二回の訪米を用意した中心人物は、トゥルンパである。いずれこの活仏の仏法を、古典的仏教と対比しながら考究したいと思っている。

48）Mountains & Rivers Order Recomended Reading List（http://mro.org/zmm/training/readinglist.php）参照。

述が提示される六階梯すべてに、トゥルンパ（系）のものを一冊ずつ配当していることになるのだ。この事実は、大道老師がトゥルンパから、教理的に、あるいは教理と実践との関係について、いかに教えられるところが多かったかを如実に物語るのである。

さて、トゥルンパから多くを学んでいるのは、実は大道老師だけではない。前角のその他の弟子も、そしてほぼ疑いなく前角本人も、そうなのである。前角老師とそのアメリカの系譜を取材した記事にこういう。

> グラスマンと玄法老師は、1976年にボールダーで客員講師として、ナーローパ・インスティテュートの創生とチョギャム・トゥルンパ・リンポチェのエネルギッシュなサンガを観察した。玄法老師は言う。彼はトゥルンパ・リンポチェ（彼はリンポチェを“dharma uncle”と呼ぶ）から学んだレッスンを、White Plum Sanghaの組織化されたコミュニティの建造へと利用した、と。LAサンガ（ロサンゼルス禅センター、訳者）は、一気に膨らんだ。1972年には八人の住み込みメンバーからなる一グループにすぎなかったのが、毎日坐禅をする百人以上の人を有するようになった、と玄法老師は振り返る。（Jones 2004：3）

ここにはっきりと、White Plum Sanghaの組織作りに、トゥルンパから学んだレッスンが生かされたことが述べられているのである。前角の一番弟子のグラスマン徹玄老師と二番弟子のマーゼル玄法老師が1976年に招聘されたという、ナーローパ・インスティテュート（現在、Naropa University）は、トゥルンパによって1974年にコロラド州ボールダーに創建された。1974年夏の第一回セッションでは、カウンターカルチャー運動をリードした著名人も多く講師を務め、二千人の受講者を集めた。仏教学関連だけでなく、詩学や心理学、書道、生け花さらにメディテーションの指導など、多彩なコースを提供した、画期的なセッションであった。一方、トゥルンパは、前年の1973年には、散在した瞑想センターなどを束ねる本部（ヴァジュラダートゥ／金剛界）も同じくボールダーに設立している。また、1975年には、ナーランダ翻訳委員会（Nalanda Translation Committee）を立ち上げ、仏教古典の英訳事業も始めている。トゥルンパの一大サンガ（現在、Shambhala Internationalという団体名で呼ばれる）は、その当時、最も複雑で、極めてよく組織されたアメリカの仏教コミュニティであった。1974年と75年にナーローパに講師として招かれたプレビシ氏が、驚嘆してそう伝えている[49)]。

大道老師が前角と出会ったのは、このナーローパ･インスティテュートに他ならない（Loori-

49）プレビシ氏はまた、74年のトゥルンパとの最初の公式面談の折に知った、彼の驚異的な能力についても語っている。トゥルンパは、対面後六十秒以内にプレビシ氏の修行歴を看て取り、次の三十分で今後の瞑想修行についての指南を与えた。それは、プレビシ氏がかつて誰からも受け取ったことのない、最も適切なものであった（Prebish 1999：158-160）。

bio: Religious Life)。大道老師は、その後ロサンゼルス禅センターへ引越し、前角の弟子となっている。ナーローパで大道老師は禅とフォトグラフィを教え[50]、おそらく前角は禅と書道を教えた（Trungpa 2004：171)。1976年のことであり、みたように、その時グラスマン老師と玄法老師もまた講師を務めている。

さて、実はこの同じ年に、前角は、仏教の学術振興を目的とした教育組織である、Kuroda Institute for the Study of Buddhism and Human Valuesを立ち上げているのだ。そしてほぼ同じ頃、White Plum Asangaも開設したという（Seager 1999：101)。つまりこの事実から、前角とその弟子たちがWhite Plum Asangaを、そしてトゥルンパのナーランダ翻訳委員会のように、東アジア仏教古典の翻訳出版を中心事業の一つとするKuroda Instituteも、トゥルンパに感化され、彼の組織をお手本として設立したことが確認されるのである。トゥルンパは、玄法老師にだけではなく、おそらく彼を知る前角門下生の間で、‘dharma uncle’と呼ばれていたことであろう。

大道老師に話を戻そう。彼の推薦する図書に現れた、トゥルンパの影響についてはすでにみた。今度は、禅の八門に目を向けてみよう。坐禅だけではなく多様な瞑想がなされるという違いがあるにせよ、八門のうち公案（独参）以外は、すべてトゥルンパが重視した訓練に他ならない。トゥルンパは、西洋にダルマを植え付けること（planting the dharma in the West）を生涯の課題とした。それには、ダルマが文化的な足枷と宗教的な魅力から離れて教えられる必要があると確信し、そう表明した。英語に、その俗語まで操れるほど習熟したのもそのためである。彼は、仏教の基本的な教えを日常生活に関連させて提示し、日常生活それ自体が修行の価値をもつような実践を発展させることに、特に腐心した。その点で、儀礼や戒も重視した。

トゥルンパからその長男に引き継がれたシャンバラ・インターナショナルでは、現在、三種の門(three gates)あるいは道を提供している[51]。三門とは、ナーランダ、ヴァジュラダートゥ、そしてシャンバラトレーニングである。ナーランダは、芸術と文化の統合による智慧の修習のための道である。この門では、生け花、茶道、フォトグラフィやダンスから、弓道、詩、医術に及ぶまでのあらゆる訓練がなされる。次のヴァジュラダートゥは、最も伝統的なチベット仏教の道である。ローカルなセンター（ダルマダートゥ）の拡張したネットワークを通じて、仏教瞑想道を指導し、仏教学を教えている。トゥルンパは、様々なレベルに対応した、理論と瞑想をバランスよく教えた。最後のシャンバラトレーニングが、最も革新的である。それは、いかなる宗教伝統とも結びつかない、世俗のスピリチュアルトレーニングの道である。

さて、ZMMの修行システムと比べてどうであろうか。両者は同様の訓練科目をもつだけでなく、ZMMが世俗、在家、出家と三種に修行者を区別する点も、シャンバラ・インターナシ

50）Glassman（2009）参照。大道老師は、60年代の始め、著名な写真家Minor Whiteに師事し、フォトグラフィだけでなく瞑想、チャンティング、呼吸訓練なども学んでいる（Kain 2001：1)。

51）Prebish（1999：161–3)、Seager（1999：125–8, 133）参照。

ョナルの三門と相似している。また修行にレベルを設けている点にも、両者に共通性が認められるであろう。

トゥルンパは、ユダヤ人をはじめとする門下生たちに、彼ら自身の伝統を敬意をもってみつめるように促したといわれる（岩本 2010：n. 40）。他方、大道老師は、ZMM創設後の最初の十二年間は、在家者にも出家者にも適応できるトレーニングプログラムを発展させ洗練させるために、中国禅と日本禅の黄金時代を研究したと述べている。その際その時期に活力と真正さをもたらした修行のキー要素に着目したともいう（Loori 2002：p. xxiv）[52]。自分の属する古き伝統を尊重する、このような姿勢にも、両者に呼応関係があるのかどうか定かではない。けれども、大道老師がトゥルンパのサンガから具体的な構想を得て、それを禅宗の古きよき伝統に照らしてZMMの修行体系を構築したことに、疑いの余地はないであろう。大道老師はいわば、トゥルンパ・サンガの禅ヴァージョンを作ろうとしたのである。

筆者が最初に大道老師がトゥルンパに私淑していると直感したのは、彼の説く禅を読んだ時である。その新鮮な禅は、トゥルンパの洞察に裏打ちされていた。大道老師の禅を紹介しながらそのことを実証することは、筆者にとってとても魅力的な作業であるが、それには教理的にかなりこみ入った議論が必要である。今回は控えざるを得ない[53]。

さて、トゥルンパが禅者たちへ影響を及ぼしただけではない。実は、トゥルンパ自身が、禅を非常に尊敬していた。いつ、どのように、トゥルンパが初めて禅を知ったのかまだ詳しく調べていないが[54]、先述したサンフランシスコ禅センターの創設者である鈴木俊隆老師との出会いは、仏教史上に残るものである。

トゥルンパは、1970年に北米にやってきてまもなく、カリフォルニアへツアーに出かけた。なおヒッピーの時代であった。仏法を理解せず、誤って修行をする若者ばかりであった。指導者も皆失格であった。だが、鈴木老師の門下生だけは違っていた。正しく、訓練されていた（Trungpa 2003：269）。トゥルンパは鈴木を「新しいスピリチュアルな父」と呼び、鈴木はトゥルンパに「君は、私の息子のようだ」と言った（Chadwick 1999：374）。共同で何かをしようと約束したが、1971年に鈴木はガンで急逝してしまった。

トゥルンパの鈴木に対する敬慕の念は強烈で、彼のセンターの仏壇にはつねに鈴木の写真が

52）たとえば道元が、大道老師にとって、一つのモデルとなった。というのも、MROが本物のアメリカの出家教団となるために、そしてそのトレーニングプログラムを確立するために解決しなければならない問題の多くは、道元が中国から日本へ禅をもたらした時に直面したものと同じである、と大道老師は認識したからである。「山水経」を掘り起こした結果、浮かび上がってきたものが、日常生活のあらゆる側面をカバーするトレーニング基盤に他ならない（Loori 2002：4–5）。

53）一点のみ指摘しておこう。大道老師は自身の禅を語る時、その重要概念として、トゥルンパの造語であり鍵語の、basic sanity（根本正気）を使っている（Loori 2002：11）。

54）北米移住以前に著述された、*Meditation in Action*（1969）にすでに禅についての言及がある（Trungpa 2003：312, 315）。またイギリス時代に日本の生け花や書道の稽古も始めている（Trungpa 2004：5–6）。

飾られていた（Trungpa　2003：xxxix）。生け花、書道、茶道などの禅文化・芸術を好み、その修行的価値を評価したトゥルンパは、鈴木の死後は、前角、嶋野など、他の禅者たちとも交流した（Trungpa 2003：489）。禅宗の坐布が気に入りチベットの色彩に変えて用いたり（Trungpa 2004：8）、禅宗の袈裟や絡子を身に纏うことさえあった。彼にはまた、禅に触発されて獲得した教理的洞察もあったにちがいない。例えば、禅の十牛図に、チベット仏教の九階梯（九乗）を対応させている[55]。

日本とチベットで別個に展開した仏法が、現代アメリカにおいて交わった。近年、マウンテン禅院のストアでは、チベット仏教の四角い坐布や、カギュ派とサキャ派の金剛鈴と金剛杵、そしてタンカ（チベット仏画の掛軸）なども販売されるようになった。また、シラキュース禅センターでは、チベットの高僧による修行プロブラムも併設されるようになった[56]。禅とチベット仏教の交渉・協働は、なお続くことであろう[57]。

5　結　び

本稿では、釈宗演によって始められた禅の布教から、大道老師のアメリカ禅の誕生までを辿り、その誕生の背景を考察した。新しい禅は、大地（文化）を踏みしめた禅者を媒介に創造されたダイナミックなものであった。大道老師は、禅についてこう述べている。

> 禅が、中国で誕生して以来、劇的に変化したことに疑いはない。しかしながら、禅の教えの強みの一つは、時と場所と立場（position）と段階（degree）の要請に応じて、変態し（metamorphose）順応する、独自の能力である。しかし一方で、この古代伝統の核心には、決定的に重要な、不変の真理が存続する。すなわちそれは、仏教の教えのハートであ

55）Trungpa（2003：417–427）．ちなみに大道老師は、トゥルンパのこのお遊びに勇気づけられ、十牛図と対応した修行階梯を導入したのではなかろうか。

56）［http://www.zencenterofsyracuse.org/tibetan practice.html］.

57）本稿脱稿直後に、*The Teacup & the Skullcup: Chögyam Trungpa on Zen and Tantra*（Vajradhatu Publications, 2007）が刊行されているのを知った。本書は、1974年に門下生と一般向けになされた、トゥルンパの七回のトーク（タイトル：禅とタントラ）が中心になっている。いまだこの書物を閲覧さえしていないが、アマゾンドットコムに、大道老師の書評が紹介されている。そのなかで大道老師は、トゥルンパを‘extraordinary master’と呼び、こう述べている。「何年間も、チョギャム・トゥルンパ・リンポチェは、全国至るところでさまざまな場において、彼の金剛智（diamond wisdom）でもって我々を感歎させた。我々は、禅の諸芸術及びそれのタントラの教説との関係に対する彼の洞察に大喜びした。全世代の仏教徒が成長した……」と。この著作の存在を見落としていたのは、ずいぶん間の抜けた話であるが、この大道老師の書評によって本稿での筆者の主張は裏付けられたであろう。トゥルンパは、禅を基底とする芸術実践に大いなる現代的修行価値を認め、トレーニングシステムに取り込んだ。他方大道老師は、膨大な仏教教理を基礎とするチベット密教から、禅の芸術実践が仏道たることの理論的根拠を与えられたのである。このような禅と密教の相互関係は、大変興味深いものである。稿を改めて、詳細に検討したい。

り、過去二五〇〇年間、地球の表面を横断した禅の旅路中ずっと運搬されてきたものである。（Loori 2002：p. xxv）

大道老師のアメリカ禅は、臨済宗と曹洞宗の二つの伝統の流れを汲んでいる。さらにアメリカ文化のみならず、現代アメリカの仏教事情を反映してチベット仏教の強い影響も受けている。だが、その禅のコアには、中国禅と同じ生命が脈々と息づいているのである。釈宗演は、アメリカをダルマが成長し発展する、然るべき場所として見た（Fields 1992：173）。近代随一といわれたこの禅僧は、確かに法眼をもっていた。

＊ 本稿は、2010年１月23日に開催されたICIS第三回国際シンポジウム『文化交渉としての宣教・布教――近代以降の新しい趨勢』にて口頭発表した原稿（「アメリカにおける仏教の布教と浸透」）に大幅に手を加えたものである。発表した内容は、本稿の半分にも満たない。本稿には、時間的制約と発表者の不手際のために発表できなかった箇所に加え、他のご発表や討論、さらに頂いたご質問によって刺激を受け、筆が進んだところもかなりある。シンポジウムの主催者並びに参加者の皆様には心よりお礼を申し上げたい。シンポジウム終了後最も考えたのは、資師相承によって継承される仏法と文化との交渉関係である。それは、神からの福音を広めることを使命とするキリスト教には見られず、また仏教でも資師相承による法系を執拗に問題にする禅や密教に特有のことであろう。いずれこの点に焦点を合わせて論じてみたい。またその一方で、アメリカにおける日本禅とチベット密教の交渉のダイナミックスを参照しながら、仏教史上かつて起こった中国や日本における禅と密教の交接を洗い直してみたくもなった。

参考文献・資料

Arslanian, Varant Nerces 2005. *Leaving Home, Staying Home: A Case Study of An American Zen Monastery*（A thesis submitted to McGill University in partial fulfillment of the requirements of the degree of Master of Arts）.

Chadwick, David 1999. *Crooked Cucumber: The Life and Zen Teaching of Shunryu Suzuki*, New York: Broadway Books.

Fields, Rick 1992. *How the Swans Came to the Lake: A Narrative History of Buddhism in America*, 3rd rev. ed., Boston: Shambhala（1st ed. 1981）.

Glassman, Bernie 2009.“Dharma Brother Daido: Bernie Glassman recalls his longtime friendship with John Daido Loori,”*Buddhadharma*（Winter 2009）.
［http://www.thebuddhadharma.com/issues/2009/xwinterfulliss/daido.php］

Iwamoto, Akemi 2005.“Zen Buddhism and Gender in America and Japan: Zenkei Blanche Hartman and Raicho Hiratsuka,”*World Fellowship of Buddhists Review*（*WFB Review*）, XLII-2 and 3: 11-16.

Jones, Noa 2004.“White Plums and Lizard Tails: The Story of Maezumi Roshi and his American Lineage,”*Shambhala Sun*（March 2004）.
［http://www.shambhalasun.com/index.php?option=com_content&task=view&id=1492&Itemid=244］

Kain, John 2001.“Zen’s Radical Conservative: John Daido Loori Roshi,”*Shambhala Sun*（July 2001）.
［http://shambhalasun.com/index.php?option=com_content&task=view&id=2818&Itemid=0］

Kirchner, Thomas Yuho 2006.“Foreword,”*Sitting with Koans: Essential Writings on the Practice of Zen Koan Introspection* edited by John Daido Loori, Boston: Wisdom Publications, pp. xi-xiii.

Loori, John Daido 1998.“Lotus in the Fire: Prison, Practice, and Freedom,”*Complete Guide to Buddhist*

America edited by Don Morreale, Boston: Shambhala, pp. 93–97.

Loori, John Daido 2002. *Eight Gates of Zen: A Program of Zen Training* edited by Bonnie Myotai Treace and Konrad Ryushin Marchaj, Boston: Shambhala（Originally published: Mt. Tremper, N.Y.: Dharma Communications, 1992）

Loori, John Daido 2005. *The True Dharma Eye: Zen Master Dogen's Three Hundred Koans* translated by John Daido Loori and Kazuaki Tanahashi with commantary and verse by John Daido Loori, Boston: Shambhala.

Loori, John Daido 2008. *Mountain Record of Zen Talks* edited by Bonnie Myotai Treace, Boston: Shambhala.

Loori-bio 2009. Author unknown, "Loori, John Daido", *Sweeping Zen*.
［http://sweepingzen.com/2009/12/23/john-daido-loori-bio/］

Maezumi-bio Founder's Biography, White Plum Asanga.
［http://www.whiteplum.org/Maezumi%20Biography.htm］

Martin, Douglas 2009. "John D. Loori, 78, Zen Abbot and Photographer, Dies," *The New York Times*.
［http://www.nytimes.com/2009/10/10/nyregion/10loori.html? r=2］.

Prebish, Charles S. 1999. *Luminous Passage: The Practice and Study of Buddhism in America*, Berkeley: University of California Press.

Seager, Richard H. 1999. *Buddhism in America*（Columbia Contemporary American Religion Series）New York: Columbia University Press.

Trungpa, Chögyam 2003. *The Collected Works of Chögyam Trungpa*, Volume One, Boston: Shambhala.

Trungpa, Chögyam 2004. *The Collected Works of Chögyam Trungpa*, Volume Seven, Boston: Shambhala.

岩本明美 2008.「仏教比丘尼戒復興運動と 2007年ハンブルグ国際会議」『南山宗教文化研究所研究所報』18：25–39.

岩本明美 2010.「ユダヤ人とアメリカ仏教 ── 仏法を愛するユダヤの民」『京都産業大学論集・人文科学系列』41：183–211.

田中ケネス 2009.「アメリカ仏教の人気のリアリティー」『宗教と現代がわかる本 2009』平凡社，pp. 132–5.

多田稔 1990.『仏教東漸 ── 太平洋を渡った仏教』禅文化研究所.